

日本語研究分野における研究動向の 70 年
—国立国語研究所「日本語研究・日本語教育文献データベース」による—
**Research Trends on the Japanese Linguistics for 70 Years:
From the Bibliographic Database of Research on Japanese Language
and Japanese Language Education**

八木下 孝雄, 高田智和

Takao YAGISHITA, Tomokazu TAKADA

国立国語研究所, 東京都立川市緑町 10-2

National Institute for Japanese Language and Linguistics,

10-2 Midori-cho, Tachikawa City, Tokyo

概要: 2011 年からオンライン・データベースとして国立国語研究所で公開している「日本語研究・日本語教育文献データベース」(<https://bibdb.ninjal.ac.jp/bunken/>)は、日本語研究及び日本語教育分野の論文・図書の書誌情報目録データベースである。『国語年鑑』(1954~2009 年, 国立国語研究所), 『日本語教育年鑑』(2000~2008 年, 国立国語研究所)の文献目録を前身としており、1950 年以降およそ 70 年間の研究成果を通覧できる。本データベースを用いて、日本語研究分野(文法, 語彙, 文体などの研究分野)の研究動向を見ると、1950 年以降 2006 年ごろまでデータ件数(登録されている論文・図書の件数)は増加傾向であるが、その後件数が減少傾向に転じていることや、分野毎に増減の傾向に差があることなどがわかった。本研究では、「日本語研究・日本語教育文献データベース」を用いて以上のような日本語研究分野のおよそ 70 年にわたる研究成果を概観していく。

Abstract: *The Bibliographic Database of Research on Japanese Language and Japanese Language Education* (<https://bibdb.ninjal.ac.jp/bunken/>, hereafter *the Bibliographic Database*) is a database of material related to the Japanese language and Japanese language education, which is published by the National Institute for Japanese Language and Linguistics. The database catalogues books and articles on these topics that have been published over the nearly 70 years from 1950 to the present. In this paper, we aim to find research trends in Japanese linguistics from the nearly 70 years of records from *the Bibliographic Database*. On analyzing research trends of Japanese linguistics, we find the results as stated below. (1) Data counts from 1950 to 2006 are on the increase, but also those from after 2006 are on the decrease. (2) In each research field our analysis did not show the same trends.

キーワード: 日本語研究, 「日本語研究・日本語教育文献データベース」, 研究動向

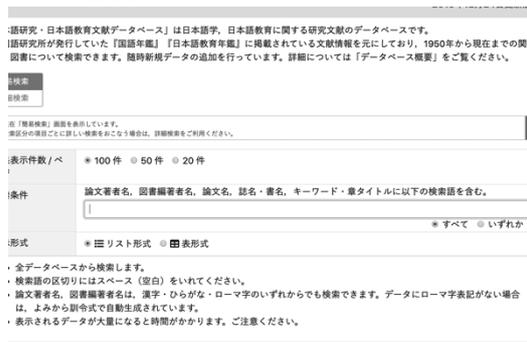
Keywords: Japanese Linguistics, *the Bibliographic Database of Research on Japanese Language and Japanese Language Education*, Research Trends

1. はじめに

国立国語研究所の「日本語研究・日本語教育文献データベース」(図 1, <https://bibdb.ninjal.ac.jp/bunken/>)は、国内外のユーザーに、日本語研究分野と日本語教育分野を中心とした学術文献の情報を提供している。2011 年に、『国語年鑑』と『日本語教育年鑑』の

論文データを統合して以来、定期的なデータ追加と、さまざまな機能追加を行ってきた。

後述するが、「日本語研究・日本語教育文献データベース」は過去約70年の日本語研究に関する学術文献の情報が検索可能になっており、データを用いて研究動向を分析することが可能である。本発表では、「日本語研究・日本語教育文献データベース」のデータを分析することで、日本語研究がどのように変遷してきたのかを概観する。



【図1 「日本語研究・日本語教育文献データベース」簡易検索画面】

2. 「日本語研究・日本語教育文献データベース」について

「日本語研究・日本語教育文献データベース」(以下「文献DB」)は、(1)雑誌論文データ(学術雑誌・大学紀要等の掲載論文)、(2)論文集データ(図書としての論文集等の掲載論文)、(3)図書データの3種からなる複合データベースとなっている。総レコード数は2019年12月現在で、約27万件である。以下にその内訳を示す。

- | | | |
|-------------|-------|-------------|
| (1) 雑誌論文データ | | 約 192,000 件 |
| (2) 論文集データ | | 約 30,000 件 |
| (3) 図書データ | | 約 48,000 件 |
| 合 計 | | 270,000 件 |

2.1 収録データの採録範囲について

文献DBは、前述したように、『国語年鑑』と『日本語教育年鑑』の文献情報を統合し、引き継ぐ形でWeb上での検索が可能なデータベースとして公開されてきた。

2.1.1 『国語年鑑』

『国語年鑑』は、1954年から2009年まで国立国語研究所で刊行されていたもので、研究文献情報を中

心に学界の情報が掲載されている。1954年(昭和29年)に刊行が始まり、冊子としての刊行は2008年で終了、2009年に電子版がPDFで刊行され、刊行が終了している。昭和29年版から2009年版まで全部で56冊刊行されている。

2.1.2 『日本語教育年鑑』

『日本語教育年鑑』は、日本語教育に関する文献情報や学界の情報が掲載されており、2000年に刊行が開始され、2008年に刊行が終了している。なお、文献DBに採録されている『日本語教育年鑑』関係の文献情報は、その前身となる1980年から1998年まで刊行された『日本語教育学会誌・機関誌掲載論文等文献一覧』(国立国語研究所日本語教育センター・第二研究室)のデータも含まれており、1960年代の文献情報から収録されている。

2.1.3 両年鑑刊行終了後のデータ

上記、『国語年鑑』および、『日本語教育年鑑』の刊行終了後の文献情報のデータ採録は、主に国立国語研究所研究図書室に受け入れた雑誌・図書から行っている。



【図2 「日本語研究・日本語教育文献データベース」データの構成¹⁾】

2.2 データ項目について

文献DBのデータ項目を以下に示す。

1. DB
2. 文献ID
3. 研究図書室請求記号
4. 論文著者名
5. 論文著者名別表記
6. 論文名

¹⁾ 論文集論文データは、『国語年鑑』での掲載が昭和32年(1957年)刊行のものからである。

7. 論文名別表記
8. 図書編著者名
9. 図書編著者名別表記
10. 誌名・書名
11. 誌名・書名別表記
12. 巻号
13. ページ
14. 総ページ数
15. 発行
16. 発行年月
17. 発行国
18. キーワード
19. 章タイトル・目次
20. 分野
21. 論文著者名ローマ字(自動生成)
22. 図書編著者名ローマ字(自動生成)
23. 更新
24. (リンク)

2.2.1 「分野」について

データはそれぞれ文献をもとに入力されているが、前節に示した「20. 分野」の項目は日本語研究の専門家が文献の内容を判断し登録している。「分野」は以下の通りである。

1. 日本語学一般
2. 日本語史
3. 音声・音韻
4. 文字・表記
5. 語彙・用語
6. 文法
7. 文章・文体
8. 方言
9. 日本語情報処理
10. コミュニケーション
11. マスコミュニケーション
12. 国語問題・言語問題
13. 国語教育
14. 日本語教育
15. 言語学
16. 資料
17. 書評
18. 辞書

なお、「分野」については、データ1件に対し、最大3つまでの分野が付与されている。これは、分野が複数にわたる研究もあるためである。

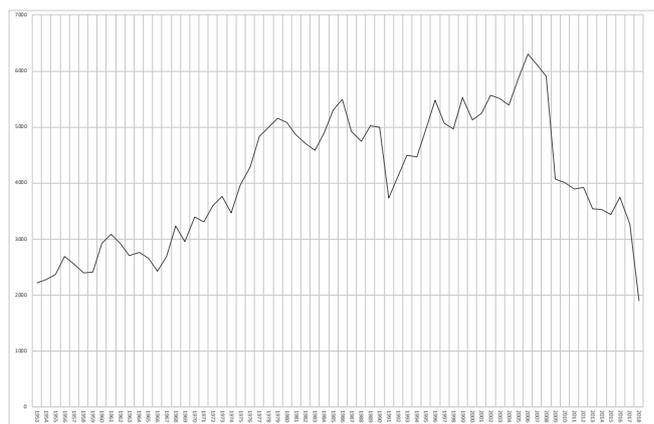
3. 研究方法

文献 DB のデータを用いて、日本語研究における研究動向を概観する。まず、全体的なデータ件数の推移を確認する。その後、データ項目から「分野」を中心に分析し、研究内容も含めた研究動向を見ていく。2.2.1 で述べたように、「分野」は日本語研究の専門家による文献内容の判断を経て付与されており、これを見ることで、日本語研究における研究の動向を見ることができると考えられる。なお、データ分析にあたっては、1953年～2018年発行の文献のデータを取り扱う。²

4. 調査・分析結果

4.1 データ件数の経年変化

まず、データ件数の経年変化を確認する。



【図3 データ件数の経年変化】

【図3】を見ると、2006年までは件数が上昇傾向であるが、その後下降傾向に転じ、最近10年間は年間3500件程度になっていることがわかる。近年の日本語研究の規模が縮小していることがうかがえる。

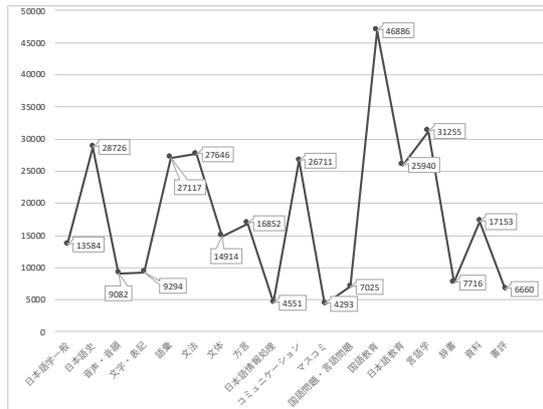
4.2 分野ごとの分析

前述のように、分野は、データ1件に対して最大3つまで付与される。そのため、データ毎に分野を分析することが難しい。ここでは、分野1つに対して1データと考え、分析していく。

² 『国語年鑑』は刊行年の前年の文献情報の掲載が中心となる。そのため、初刊は1954年刊行であるが、掲載されているのは、1953年に発行された文献情報が中心となる。2019年刊行の文献についてのデータは現在入力作業中であり、

比較できるだけのデータ数が揃っていないため、分析対象から外した。

4. 2. 1 分野ごとの総数



【図4 分野毎の総数】

【図4】は、分野ごとに件数を集計したものである。まず、件数が最も多いのは「国語教育」分野の研究であることがわかる。「言語学」、「日本語史」、「文法」、「語彙」、「コミュニケーション」、「日本語教育」の分野が25,000件以上で続く。15,000件前後のものとしては、「資料」、「方言」、「文体」、「日本語学一般」があり、その他の分野は10,000件以下となっている。

4. 2. 2 分野毎の経年変化

分野毎の経年変化を確認する。それぞれグラフを以下に示す。



【図5 分野「日本語学一般」の経年変化】



【図6 分野「日本語史」の経年変化】



【図7 分野「音聲・音韻」の経年変化】



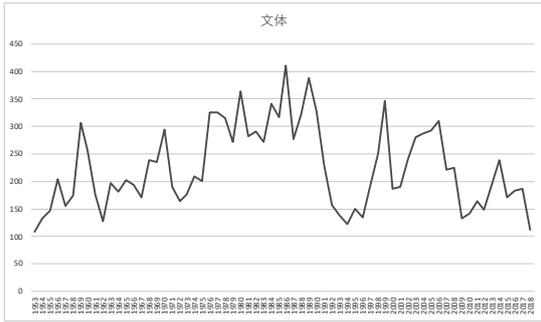
【図8 分野「文字・表記」の経年変化】



【図9 分野「語彙」の経年変化】



【図10 分野「文法」の経年変化】



【図 11 分野「文体」の経年変化】



【図 15 分野「マスコミュニケーション」の経年変化】



【図 12 分野「方言」の経年変化】



【図 16 分野「国語問題・言語問題」の経年変化】



【図 13 分野「日本語情報処理」の経年変化】



【図 17 分野「国語教育」の経年変化】



【図 14 分野「コミュニケーション」の経年変化】



【図 18 分野「日本語教育」の経年変化】



【図19 分野「言語学」の経年変化】



【図20 分野「辞書」の経年変化】



【図21 分野「資料」の経年変化】



【図22 分野「書評」の経年変化】

上記の図をそれぞれ見ていくと、全体のデータ件数の増減の傾向と一致しているのは、「文体」「方言」「辞書」であった。また、全体よりも件数の増加が早い時期に起こり、一旦減少するものの、近年再度増加傾向にあるものが、「日本語史」「音声・音韻」「語彙」「言語学」の分野である。上昇傾向のみのものが、「文字・表記」「文法」「日本語情報処理」「コミュニケーション」「日本語教育」であった。下降傾向のみのものは、「マ

スコミュニケーション」「国語問題・言語問題」「国語教育」であった。また傾向が不明なものとして、「資料」「書評」があった。このように、全体的な傾向に一致していないものが多く、分野毎に、研究が盛んな時期、沈滞している時期などが見て取れる。

4.3 考察

【図4】から、過去約70年間の日本語研究で最も研究されている分野は「国語教育」に関するもののである。しかし、これはデータの前身となっている『国語年鑑』の文献情報の収集方針とも関連していると考えられる。刊行初期の『国語年鑑』は国語教育の文献情報を多数載せていた。[1]【図17】の「国語教育」分野の経年変化を確認すると、登録データについて一貫して減少傾向にあることが分かる。また、2番目に多く研究されていると考えられる「言語学」分野については、日本語と外国語の対照研究なども多く含まれるため、日本語研究の関連研究と捉えられるものもデータとして登録されている。

以上から、日本語研究そのものの研究としては「日本語史」がもっとも多く、「文法」、「語彙」、「コミュニケーション」と続いている。これらの4つの分野について、経年変化を確認すると、「日本語史」「語彙」は、増加傾向の後に減少し、近年再度増加しているのに対し、「文法」「コミュニケーション」は全体的に上昇傾向である。件数が同程度でも、研究の活況、沈滞により「分野」の経年変化に差が見られることがわかる。

5. おわりに

文献DBのデータを用いて、日本語研究の研究動向を見てきた。以下に、まとめとして見られた傾向を示す。

- 1) 日本語研究は2006年を境に研究の件数が上昇傾向から下降傾向へ転じている。
- 2) 分野毎の件数では、「国語教育」、「言語学」の件数が多くなっている。その他に、「日本語史」、「文法」、「語彙」、「コミュニケーション」、「日本語教育」の分野が多く研究されている。
- 3) 分野毎にデータ件数の経年変化を見ると、全体のデータ件数の傾向と合致している分野の方が少なく、上昇傾向が続いているもの、減少傾向がつついているものなど、それぞれ分野により活況、沈滞、と傾向が分かれている。

参考文献

- [1] 八木下孝雄(2018)『『国語年鑑』の分野区分にみる研究動向の変遷』『日本語学会2019年度春季大会予稿集』日本語学会, pp.159-162